



Title	1970年代後半から1980年代にみる花結びの伝承 : カルチャーセンターと社会背景に注目して
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 37-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100271
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1970 年代後半から 1980 年代にみる花結びの伝承

カルチャーセンターと社会背景に注目して

矢 島 由 佳

キーワード

花結び, 手芸文化, 組紐, カルチャーセンター, 文化の伝承
Hanamusubi, Handicraft Culture, Japanese Braid, Cultural Centre,
Cultural Dissemination

はじめに

1. カルチャーセンター誕生と女性の意識変化
 2. 『装苑』および『ドレスメーカー』にみる「和の手芸」および「結びを用いた手芸」
 - 2.1 掲載記事にみる「和の手芸」および「結びを用いた手芸」
 - 2.2 掲載広告にみる「和の手芸」および「結びを用いた手芸」
 3. カルチャーセンターにおける花結びの伝承
- おわりに

はじめに

花結びについて、『日本国語大辞典』は「花形に結んだ紐結びの総称。三つ輪結び、梅結び、菊結び、玉房結びなどがある。これらは装飾として単独にも使われたが、また被布などの入紐としても使われた。また、細い紐を種々の花形に結ぶ女子の遊び。女子の諸芸の一つとされた」と定義する¹。そして、手芸本等においても、花結びは日本の伝統文化の一つとして認識され、女子の手ずさみや平安時代の高貴な女性の教養の一つであったとして、『源平盛衰記』に言及して、説明されてきた。このような言説は江戸時代以降花結びを紹介する常套句であり、花結びはかつて身分の高い女性の嗜みであったというイメージが流布してきた²。他方、その文化の伝承過程は十分に明らかにされておらず、今日の花結びの伝承に関する一般理解として、花結びは茶道や香道の系譜に位置付けられることが多い。これまで花結びの伝承に関する考察において、明治の小学校手工教育、明治から昭和にかけての女子学生を対象とした裁縫教育および礼法教育で花結びや紐結びが教授されてきたことや、花結びの伝承が学校教育を通じて見られなくなった後に 1980 年代以降、カルチャーセンター等で女性が花結びを楽しむようになったことが看過されている。そこで本稿は、1970 年代後半から 1980

本稿は、第 254 回意匠学会研究例会（2024 年 5 月 25 日、近畿大学東大阪キャンパス）での発表にもとづく。

年代の花結びの伝承に焦点をあて、花結びが「手作り」という一つの消費活動として女性に提示されたのかを明らかにすることを試みる。茶道や香道の系譜とは異なる花結びの伝承過程の一端が明らかになると考えるからである。なお、本稿は、花結びを装飾的な目的で生活空間において用いる紐結びを意味する語と定義して論を進める。

1. カルチャーセンター誕生と女性の意識変化

1970年代は、繊維産業の技術革新の結果、合成繊維が普及したことも手伝い、生産性が上がり、質の良い既成服が大量生産されるようになった。1970年には既成衣料品のサイズに関する日本工業規格（JIS）も制定され、その後1980年代には「既成服」が定着した。そして洋服の普及が広くみられるようになった時期と呼応して、1970年代以降裁縫教育は衰退期に入った³。その潮流の中、和裁教育を通じての花結びの伝承が途絶えてからは、後述の通り、花結びはカルチャーセンターを通じて主に女性たちに伝承されていくこととなった。その詳細を考察するにあたり、まず教育機関としてのカルチャーセンターの変遷について概観しておきたい。カルチャースクール、文化教室とも別称されるカルチャーセンターの嚆矢は、1955年3月に開講した産経学園であり、その後1970年代に各地で開設されていった⁴。山本思外里および歌川光一によるカルチャーセンターに関する先行研究によれば、カルチャーセンターのブームの発端は、1974年4月1日に朝日カルチャーセンター開講にみとめられ、同年2月1日の申し込みには応募者が殺到したことが知られる。カルチャーセンター全体でみれば、1970年代前半まで主流であった趣味的、実用的講座のほか、1970年代後半に開講数の増えた大学院レベル相当の教養講座が設けられたことにその特色があると同研究は説明する⁵。その背景には、1979年に開設のNHK文化センターや1984年に開設の読売文化センターユニオンのように、規模の大きいカルチャービジネスは知名度があるため、講師陣が充実し、講座数および受講者数が多い、という側面があった⁶。さらに、先行研究に沿って各種講座の受講者層に着目すると、高度経済成長期の主婦たちが時間的ゆとりと経済的余裕を手にし、人々の消費スタイルが多様化したことに加えて、女性の意識変化が1970年代に見られるようになる。それにともない、「男は外、女は内」という性差別意識への問い直しが行われ、女性が積極的に活動の場を家の外に見出すようになり、「自己成長、知識や技能を身につける、趣味を通じた交友関係の構築」等多様な目的を充足させるために女性や退職後の男性がカルチャーセンターに集った⁷。その後、カルチャーセンターは、1980年代にはどの教室も満員となるという黄金時代を迎えたが⁸、この1980年代は、女性の意識が大きく変容した時代でもある。上野千鶴子は、1980年代に主婦が出歩くようになった最大の要因は主婦が兼業主婦化したことにあり、1983年には有業の主婦の数が無業の主婦の数を上回ったと指摘する⁹。さらに、井上

輝子が主張するように、「80年代は女性の時代」という標語が生まれた背景には、消費社会化のターゲットとして女性が注目されたことのほか、1975年の国際婦人年を契機に同年に「行動するおんなたちの会」が発足するなど、フェミニズム運動が高まったことによる女性自身の意識と行動の変化があったことも影響していると考えられる¹⁰。そのような潮流の中、裁縫教育、とりわけ和裁教育においても伝承されてきた、花結びを含む「和の手芸文化」は、一種の「商品」としていかに価値づけられて、女性に提示されていたのであろうか。

2. 『装苑』および『ドレスメーカー』にみる「和の手芸」および「結びを用いた手芸」

1980年代にみる拡大する消費社会という側面から、手作りという消費活動について着目すると、神野由紀が指摘するように、1970年代後半に趣味が大衆化する中、1976年には手作り関連産業の振興を目指した日本ホビー協会（一般社団法人）が設立され、「作って楽しむ」という消費活動が一つのマーケットとして確立していくことになったことが注目に値する¹¹。1980年以降、花結びはカルチャーセンターで教授されたが、それを受け入れる素地は1980年以前に既に醸成されていたと想像できる。そこで文化服装学院が母体である文化出版局が1936年に創刊した雑誌『装苑』およびドレスメーカー女学院を設立した杉野芳子が監修した1949年創刊の雑誌『ドレスメーカー』に注目したい。花結びを包摂する「和の手芸」および「結びを用いた手芸」に関する内容が如何に提示されていたのか、カルチャーセンターブームが始まった1974年からカルチャーセンターで花結びの教授が始まった1980年の間に刊行された記事および広告を分析してみたい。ここでの「和の手芸」とは、「日本の伝統」に関する記述が見られ、材料に布や糸を使う手芸で作り方の記載があるものをさすものとする。

【調査対象】：『装苑』1月号（1974; 昭和49）～12月号（1980; 昭和55）、文化出版局『ドレスメーカー』No.277（1974）～No.372（1980）、株式会社鎌倉書房（1975（11）No.301, 1976（1）No.303, 1976（2）304, 1978（10臨時増刊）No.342欠号）

分析対象を2誌に絞った理由は、文化服装学院およびドレスメーカー女学院は、戦後に見られた洋裁学校ブームを牽引し、今日の裁縫文化や、ひいては手芸文化の礎を築いてきた教育機関であるため、これらの機関が発行した雑誌の影響力が他誌より大きいと考えられるためである。1920年設立の文化服装学院が出版母体である『装苑』は、1936年に創刊し、1944年2月に休刊後、1946年7月に復刊され、現在も刊行が続く。一方、『ドレスメーカー』は、ドレスメーカー女学院を1926年に設立した杉野芳子の監修のもと、1949年に刊行、1993年に休刊した。特筆すべきは、両校の卒業生が全国に洋裁学校を設立したほか、在校生や卒

業生向けに雑誌が刊行されていた事実であり、そこから日本の手芸文化の醸成に及ぼした影響力が大きいと考えられる¹²。明治時代以降、女子を対象に裁縫教育が行われ、高等女学校、短期大学および四年制大学の前身である女子専門学校のほか、「各種学校」に分類される「洋裁学校」において和裁も洋裁も教授されたと井上雅人は説明する¹³。さらに、1950年代に戦後の洋裁学校ブームが生じ、1952年には40万人を超える和洋裁学校の生徒がいたことは、1950年の18歳人口が約85万人であったことを考慮すれば驚異的なことだという。その後、60年に和洋裁学校は生徒数のピークを迎え、70年代は横ばい状態を経て、1976年に専修学校設置基準が定められて以降、洋裁学校の多くは専修学校に変容した。この一連の流れにみる「洋裁学校ブーム」を象徴したのが、文化服装学院とドレスメーカー女学院の覇権争いであり¹⁴、両校が戦後の手芸文化形成に及ぼした影響力の強さを井上は指摘する。

2.1 掲載記事にみる「和の手芸」および「結びを用いた手芸」

雑誌『装苑』、『ドレスメーカー』の記事において「和の手芸」および「結びを用いた手芸」は如何に価値づけられ、提示されていたのであろうか。それを探るため、第一に、「和の手芸」に関する記事内容について考察していく。『装苑』は料理の特集やインテリアコーディネートに関連した記事を含み、ファッション雑誌でありながら扱う記事の範疇が広いことにその特徴がある。調査の結果、「和の手芸」が前面に押し出されるのは、お正月や雛祭りに関した内容に多いことが明らかになった。和服を着た西洋人の女性が登場し、組紐作りや和の小物作りの紹介は1月の新年号のほか、浴衣の作り方や生地を紹介する7月号にも見られた。他方、西洋文化を模倣する中で日本の歳時記に即した手芸の様相に言及する記事も見られ、柔軟性のある「和の手芸」が読者に提示されていたことも窺われる。このように、和洋折衷を推奨する内容は、日本刺繍とフランス刺繍を取り混ぜた刺繍をクッションに施すこと、洋服に刺し子を施す「刺し子のドレス」の紹介、ジーンズジャケットにつけるための家紋をあしらったワッペンとして「紋章ワッペン」等の記事に見られた（図1）。

一方、『ドレスメーカー』には、『装苑』と同様に、インテリアコーディネートや料理の紹介記事も含まれるが、和小物等を作る手芸よりも洋服や和服作りをすることを奨励する内容の記事に、より多くの誌面が割かれていることが判明した。『装苑』との相違点としては、「和の手芸」に関する記事がほとんど見られず、カラーページで取り上げられることも少ないことが観察できる。このことから、「和の手芸」を紹介する優先度は低く、『装苑』に比して洋服作りという実用に重きを置いていたことが窺える¹⁵。「和の手芸」に関する記事は、端切れで作る日本の小物としてのお手玉が紹介記事2件に留まっている（図2）。「和の手芸」を重視しない同誌の姿勢は、1970年代には100万部の発行部数を超えた国民的影響力のあった

発行年(月), 掲載ページ	記事の見出し名	発行年(月), 掲載ページ	記事の見出し名
1974(1), pp.134-135, pp.290-293	★手芸★一月★古いものを新しく考えてみて…きもの地の小物入れ	1976(3), pp.88-89, p.98	3月のアイディア SO-EN ⑥はまぐりのひな人形
1974(2), pp.140-141, pp.290-291	★手芸★ FEBRUARY ★梅づくし★撮影=鈴木勝己	1976(7), pp.76-77, pp.92-93	IDEAS SO-EN 浴衣地のドレス7月のアイディア SO-EN
1974(3), pp.124-125, pp.257-259	★手芸★三月★蝶づくし★撮影=鈴木勝己★デザイン=江島任★製作=永山登志子 稲山悦子(秋山刺繍研究所)	1976(9), pp.82-83, pp.94-95	IDEAS SO-EN 刺し子のドレス9月のアイディア SO-EN
1974(4), pp.122-123, pp.249-251	★手芸★4月★桜づくし★撮影=鈴木勝己★デザイン=江島任	1977(1), pp.115-121, pp.124-130	1月のアイディア SO-EN 刺繍の半衿, 柄合せ, 一閑張りのインテリア, ふろしきクッション
1974(5), pp.126-127, pp.240-242	★手芸★五月★刺繍=村山美沙子 おしどりづくし	1977(2), pp.172-173	マイティはオールマイティ No.2 マイティ日本刺繍に挑む
1974(6), pp.134-135, pp.212-214	★手芸★六月★刺繍=村山美沙子 かきつばたづくし	1977(7), pp.184-185	マイティはオールマイティ No.7 マイティ浴衣を仕立てる
1974(7), pp.162-163, pp.273-274	★手芸★七月★刺繍=村山美沙子 ぼたんづくし★撮影=藤井英男	1977(10), pp.194-195	マイティはオールマイティ No.10 マイティ組みひもベルトを作る
1974(8), pp.164-165, pp.283-284	★手芸★八月★刺繍=村山美沙子★撮影=西川治 おもだかづくし	1978(1), pp.63-64	1月のアイディアガールズカレンダー 3(火) ちりめんの袋物
1974(9), pp.160-161, pp.276-279	★手芸★九月★刺繍=村山美沙子★撮影=西川治 ぶどうづくし	1978(3), p.74	3月のアイディア SO-EN アイディア ガールズカレンダー 3/14 〈花ふきん〉
1974(10), pp.166-167, pp.288-290	★手芸★十月★刺繍 村山美沙子 もみじづくし	1978(7), pp.82-85	ミシン仕立てのゆかた
1974(11), pp.158-159, pp.304-307	★手芸★十一月★刺繍 村山美沙子 菊づくし	1978(12)	チラシ フレッシュ講座ベスト 8
1974(12), pp.172-173, pp.299-301	★手芸★十二月★刺繍 村山美沙子 雪づくし	1979(1), pp.97-101, pp.106-109	アイディアガールズカレンダー★一月のアイディア SOEN ★
1975(1), pp.6-12	日本の柄	1979(5) 付録, p.16	「刺し子 5」『服飾手芸便利帳』
1975(1), pp.52-67	SO-EN10のアイディア 〈日本のいいもの〉	1980(1), p.123-129	IDEAS SO-EN 1月手作り事始め
1975(11), p.58	SO-EN10のアイディア オールリフォーム 6 財布と足袋入れからできるバッグ	1980(8)pp.80-85	浴衣をつくりましょう
1976(1), pp.36-39	KINT 日本の柄		

図1 『装苑』にみる「和の手芸」関連記事, 筆者作成

雑誌『暮らしの手帖』に1948年9月20日から2014年7月25日に掲載された記事にみる裁縫や手芸に関する記事内容と記事数に関する青木藍の分析結果と比較するに値する。

『暮らしの手帖』には、1970年代から1990年代に和裁に関する掲載記事がなかった一方、洋裁関連の記事が全体の記事数に占める割合が、1970年代は1.0%, 1980年代は0.6%, 1990年代は1.3%であったことが示されている¹⁶。要するに、1970年代の服飾教育を受けていない読者には、和裁にせよ、洋裁にせよ手芸は主な関心事でなかったことが窺える。

第二に、「結びを用いた手芸」の受容について『装苑』、『ドレスメーカー』の順で記事を見ていきたい。その内容を考察すると、マクラメが『結びを用いた手芸』として両誌で取りあげられていたことがわかった。マクラメ技法が何なのか簡単に説明すると、中東が起源の結びでスペインを経由してヨーロッパに広がり、イギリスでもスチュアート朝からヴィクトリア朝後期まで流行した¹⁷。その後、1960年代から1970年代にブームになり、イヴ・サンローラン等のファッションデザイ

発行年(月), 掲載ページ	記事の見出し名
1975(2), No.292, p.91, p.109	端ぎれで作る日本の小物
1980(6), No.364, p.103, p.114	はぎれで作りました

図2 『ドレスメーカー』にみる「和の手芸」関連記事, 筆者作成

ナーによるデザインにもマクラメは採用されていた¹⁸。『装苑』には、1974年のマクラメを用いたバッグ作りおよび1975年のマクラメを用いたガラスボトルの装飾、『服飾手芸便利帳』の「マクラメ・レース」技法紹介の3件（図3）、『ドレスメーカーキング』には、4件のマクラメで作るバッグの紹介記事が見られた（図4）。この一連の記事は、1970年代にマクラメが流行していたことの裏付けとして理解し得る。さらに、マクラメのほか、『装苑』には、中国服に用いる装飾結びを紹介した記事も見られた。具体的には、チャイニーズブラウスに用いる装飾用の結びのボタンの作り方が紹介されている（図5）。ここで指摘すべきは、釈迦結びは、着物コート等にも用いるものであり、1970年代まで和裁教育で教えられてきたが、その関連記事が確認できない点である。つまり、『装苑』の雑誌編集者は、読者が着物に用いる飾り結びに関する知識を求めているものと想定した、または提供する意義を見出さなかったもの、と理解できる。他方、『ドレスメーカーキング』には、中国服の装飾ボタンに用いられる結びの紹介は見当たらないが、1976年11月号に、「ひもの結び方いくつ知っていますか？」と題した記事が確認された。紐結びが洋装に用いるベルトやアクセサリーとして応用できるという趣旨の下、「はな結び」と称した蝶結びを含んだ13種類の紐結びが図解入りで紹介されている（図6）。なぜ同記事が書かれたのであろうか。記名記事でないため、記者の特定はできないが、服飾記事の編集には13名の女性関わっていた。1970年代半ばまで用いられた和裁の教科書に紐結びに関する記載があったことに鑑みると、裁縫学校で学んだ戦前生まれの編集者の関与があり、その見識が記事に反映されたと推察できる¹⁹。

発行年（月）、掲載ページ	記事の見出し名
1974(8), pp.218-219	マクラメ編みのリゾートバック
1975(6), pp.64-65, p.226	SO-EN10のアイディア 9ガラスのボトルで
1979(5) 第一付録, p. 37	「マクラメ・レース」『服飾手芸便利帳』
1979(8), pp.56-57, pp.76-77	8月の海で IDEAS SOEN 〈マクラメの間仕切りとバッグ〉

図3 『装苑』にみるマクラメ関連記事，筆者作成

発行年（月）、掲載ページ	記事の見出し名
1977(6)No.322, pp.136-137, p.226	「手編みのオリジナル・バッグ」
1979(7)No.352, pp.142-145	「リゾートバッグは手作りで」
1979(9)No.354, pp.124-129	〈9月の手芸〉「マクラメのインテリア」
1980(6)No.364, p.104, pp.116-117	「はぎれで作りました HANDMADEの世界」

図4 『ドレスメーカーキング』にみるマクラメ関連記事，筆者作成

発行年（月）、掲載ページ	見出し名
1979(9)No.354, p.126	「ダルマ手芸系 マクラメ」増田株式会社の広告
1979(9)No.354 巻末背表紙内側	「ハmanaカマクラメ針」「ハmanaカマクラメコード」ハmanaカ株式会社の広告
1979(10) 巻末背表紙内側	「ハmanaカマクラメ針で編んだ個性的なベスト」ハmanaカ株式会社の広告

図5 『装苑』にみる中国結び関連記事，筆者作成



図6 「ひもの結び方 いくつ知っていますか?」『ドレスメーカーキング』1976(11)No.315, pp.178-179。

2.2 掲載広告にみる「和の手芸」および「結びを用いた手芸」

『装苑』および『ドレスメーカー』の広告からも「和の手芸」および「結びを用いた手芸」がいかに価値づけられていたか考えることができる。次に、広告内容の分析に進みたい。1979年8月号の『装苑』には、「手芸を始めるなら今がチャンスー手芸教室の仲間たち」と称して、機織り、パッチワーク、刺繍、かご編みをカルチャーセンターや通信講座で手芸を学ぶことを誘う記事が見られた。同記事は、カルチャーセンターが全盛期を迎える1980年代を目前にして女性による手作りという消費活動がカルチャーセンターだけでなく通信講座を通じても行われていた様相を示す証左とも捉えられる。また、雑誌の巻末の通信講座広告の中で、「和の手芸」および「結びを用いた手芸」に関するものを見ていくと、「袋物、和裁、組紐、手織り、マクラメ」の技術習得を目的とする広告が確認できる（図7、図8）。これらの広告内容を実際に順に見ていき、広告コピーをいくつか挙げてみたい。

第一に、『装苑』1975（2）にみる日本アートスクールによる袋物の通信講座広告には、「いつでもどこでも伝統美と豪華さを秘めた気品あるオシャレが思う存分楽しめます。」「豪華袋物一式と月々数万～10万円台の高収入、教室開設の師範資格免状があなたのもの！！」、「オシャレを楽しみながら残り布利用で一ヵ月数万円の副収入」等とあり、通信講座受講生の顔写真と次のような体験談が添えられている。「オシャレの楽しめる大好きな袋物を作り作って20個は超えました。袋物をはじめて3ヵ月目ですが、先月から近所の奥様の依頼に応え、残り布を利用した袋物づくりで月3～4万円の副収入を得ています。いま目の前の三級技能資格免状を目指し夢いっぱいです」。ここでは、通信講座を受講する効用が楽しみ、すなわち趣味のためのみならず、副収入を得る実益のためであることが強調されている。『ドレスメーカー』1975（8）にみる日本アートスクールによる袋物の通信講座広告には、見出しに「たのしい袋物づくりとうれしい副収入自宅教室開設の師範資格も得られます」とあり、講座を受講し、袋物づくりで副収入を得たという3名の女性の体験談が実名、顔写真付きで掲載され、ここでも趣味と実益が講座受講の効用として強調されていることがわかる。

第二に、『装苑』1978（12）にみる大塚末子きもの学院による和裁講座の広告には、「わかりやすい教材と親切な指導で上達 OK! 価値ある特技〈和裁〉」という見出しの後「近年、服飾系の学校では、洋裁志望者が減少し、逆に和裁が少しずつ増加する傾向にあります。これは和裁をやる人が洋裁人口にくらべまだまだ少なく、今和裁を身につけておくと、仕事がたくさんあり、将来和裁教室を開くなど活躍の分野が広いからです。（中略）女性一生の財産になる価値ある特技〈和裁〉をこの機会にあなたもいかがですか。」と述べられている。さらに、『装苑』1979（3）にみる同学院の和裁（文部省認定）講座広告には、実名顔写真入りで、活躍する修了生の体験として、「子どものそばにいながら何かできる仕事はないかと、ずいぶん

職安に足を運んだり、内職もしてみました、なかなか思うようなものがなく、ほうぼう回り道したあげく、大塚末子きもの学院の通信学生になりました。(中略)一昨期待望の和裁教室を開くことができ、26人の生徒さんと楽しく勉強しています」と記され、和裁技術を身につける動機が副収入を得るためであったとの情報が広告として有効と見做されていた様をそこに読み取ることができる。

第三に、『装苑』1974(11)にみる日本伝統芸術協会による組紐の通信講座広告には、「わずか4ヶ月でマスターできます 組ひも芸術 新しい通信講座」,「秘められた伝統美『組ひも』がいま、初めて通信教育になりました。」と記され、平打ちの組紐を結んだ「髪飾り結び」の写真が添えられている。他方、『ドレスメーカーキング』(1978(3))には、日本モア・ライフ学院〈美しい組ひも〉による組紐講座の広告には、「髪飾り結び」のイラストを添えて「美しい組ひもがカンタンに組める」,「始めたその日に美しい帯締めが作れます」とある。いずれも組紐を結んだ結びのイメージとともに組紐の通信講座の広告がなされていることに特徴がある。

第四に、『装苑』1977(3)にみる日本伝統芸術協会による手織り講座の広告には、「通信教育の本格派 京手織り 4ヶ月で完全に習得」,「京手織りは伝統から生まれた親しみやすい手織物です。…」,『ドレスメーカーキング』1976(11)にみるサロン・デ・ボザールによる手織り講座広告には、「六年の歳月を経て京都で完成された気品ある伝統の手織り」とあり、京都と関連づけた伝統的な手織りであるイメージが強調されている。『ドレスメーカーキング』1978(3)にみる日本手芸センターによる手織り講座広告には、「洋服地からおしゃれ用品・インテリアまで思いのままに織れる 手織りが自宅でやさしく身につく!!」という見出しに続いて「・新しい指導によって、短期間のうちにどなたでも確実に上達できる! (中略)・大きな副収入をうむ今、注目の特技!! ・日本の伝統工芸『手織り』がわかりやすい指導によって、どなたでも自宅でやさしく楽しめます…」とあり、手織りは副収入になることや伝統工芸であることが示されている。他方、日本ヴォーグ社の手織り講座広告には、「たて糸とよこ糸が織りなすハーモニー 手織り」(『装苑』1978(11), 1979(4), 1980(3), 『ドレスメーカーキング』1978(11), 1980(3)),「既製品にはない本物を求めて」(『装苑』1979(10), 『ドレスメーカーキング』1979(10)),「ひと織りひと織り心を込めて暮らしを彩る手織りの布地」(『装苑』1980(10), 『ドレスメーカーキング』1980(10))とあった。しかし、そこに日本の伝統に関する記述は見られず、同じ手織り講座でも運営母体によって強調される内容が異なることが判明する。他方、日本ヴォーグ社の広告にみるマクラメ講座広告については、「結びで作るアクセサリとインテリア」(『装苑』1978(11), 1979(4), 『ドレスメーカーキング』1978(11), 「素朴でモダンな結びの手芸」(『装苑』1980(3), 『ドレスメーカーキング』1980(3)),

「海外旅行で見たマクラメに魅せられて」（『ドレスメーカー』1979（10））、「素朴でモダンな結びの手芸」（『ドレスメーカー』1980（3））、「素朴でモダンな結びの手芸です インテリアやファッションに……」（『ドレスメーカー』1980（10））と紹介された。また、マクラメの材料広告も見られ、「ハmanaマクラメ針」の宣伝広告（『ドレスメーカー』1979（9）、『装苑』1979（10））が見られ、マクラメが流行していたことが材料提供広告からも窺える。

以上の広告内容でまず注目に値するのは、「和裁」、「袋もの」、「手織り」の通信講座広告に見られた、自ら手芸によってお金を稼ぐことを奨励する内容であろう。それらは次のいずれかに大別できる。(1) 通信講座で身につけた技能を拠り所に教室を開き、生徒からお稽古代を徴収して副収入を得る。(2) 通信講座で身につけた技能で「商品」を作り、それを販売することで副収入を得る、すなわち「内職」の奨励。家計補助のための内職については、1960年代末に劇的に拡がり、1969年には約130万人、1973年にピークに達し、163万人が従事し、その後徐々に減少した事実が知られる²⁰。また、1973年当時の家内労働従事者184万人に占める女性の割合が92.6%であることから、家内労働従事者に内包される内職従事者に占める女性の割合もそれに類似していたと考えられる²¹。1973年の人口が1.09億人であり、内職従事者163万人は、総人口の約1.5%に相当し、決して多くはないが、2023年度の18歳新成人が112万人であることに鑑みれば、その数は決して少なくなく、内職は珍しいことではなかった²²。また、袋物講座の宣伝広告には、顔写真を添えて内職の成功体験を語るものが多く、そこには内職をすることは恥じることではない、という意識が反映されている。読者にも程度の差はあれ、同様の意識は共有されていて、広告主の実益に繋がったため、繰り返し成功体験談を含む広告が起用されたものと推察できる。このように顔写真入りで内職の成功体験が戦後の女性雑誌に頻繁に記載されていることについて、アンドルー・ゴードンは、意欲的な中流階級の人が、労働者階級と並んで内職に勤しんでいたと証拠を解釈している²³。

他方、「袋物、和裁、組紐、手織り、マクラメ」という通信講座項目にも着目したい。1901年の高等女学校令施行規則にて定められた手芸には「編物、組紐、袋物、刺繍、造花」があるが、そのうち「和の手芸」に分類でき

る「袋物、組紐」と明記されている点が注目に値する²⁴。また、その宣伝文句には「日本の伝統」を意識した記載がないものの、ヴォーグ社や日本手芸センターによる「棒針編・アフガン編」や「手あみ」の「編物」の通信講座広告が多く確認できたことも看過できない。なぜなら、「袋

通信講座内容	通信講座主催者	『装苑』の書誌情報：発行年(月)
袋物技術の習得	日本アートスクール	1974(2), 1974(10), 1975(2), 1977(3), 1978(12), 1979(3)
組紐技術の習得	日本伝統芸術協会	1974(5), 1974(11), 1977(10)
組紐技術の習得	中尾くみひも教室	1977(10)
和裁技術の習得	大塚末子きの学院	1978(12), 1979(3), 1980(6), 1980(11)
手織り技術の習得	日本伝統芸術協会	1977(3)
手織り技術の習得	日本ヴォーグ社	1978(11), 1979(4), 1979(10), 1980(3), 1980(10)
マクラメ技術の習得	日本ヴォーグ社	1978(11), 1979(4), 1979(10), 1980(3), 1980(10)

図7 『装苑』にみる通信講座広告、筆者作成

物、組紐、編物」に関する通信講座広告は、前述の明治時代の高等女学校令施行規則で定められた「女子にふさわしい手芸」の範囲を1970年代においても踏襲、再生産したものと解釈できるためである。

通信講座内容	通信講座主催者	『ドレスメーカー』の書誌情報：発行年(月)
袋物技術の習得	日本アートスクール	1974(2)No.278, 1974(4)No.280, 1974(6)No.283, 1975(3)No.293, 1975(6)No.296, 1975(8)No.298, 1976(3)No.305, 1976(4)No.306, 1978(3)No.333, 1978(5)No.335
現代ふくろもの(和装小物、バッグ制作)技術の習得	日本アートスクール	1979(3)No.347
組紐技術の習得	日本伝統芸術協会	1974(12)No.290, 1976(3)No.305
組紐技術の習得	新日本モア・ライフ学院 (美しい組ひも)	1978(3)No.333, 1978(11)No.343
手織り技術の習得	サロン・デ・ボザール	1976(11)No.315
手織り技術の習得	日本手芸センター	1978(2)No.332, 1978(5)No.335
手織り技術の習得	日本ヴォーグ社	1978(11)No.343, 1979(10), 1980(3)No.361, 1980(10)No.369
マクラメ技術の習得	日本ヴォーグ社	1978(11)No.343, 1979(10)No.355, 1980(3)No.361, 1980(10)No.369

図8 『ドレスメーカー』にみる通信講座広告、筆者作成

3. カルチャーセンターにおける花結びの伝承

カルチャーセンターにみる花結びの伝承に関する先行研究は、管見の限り存在しない。そのため、以下では花結びの第一人者である田中年子氏(1941生)に筆者が2023年6月17日に実施したインタビュー内容に則してその内実を述べる。田中氏は入門した石州流清水派の茶道で師匠の橋田正園氏(1923-1991)に1964年に出会い、橋田氏が『玉のあそび』(寛政18;1801)の結びを復元もしていたことから結びに出会った。その復元の取組が1980年1月7日の朝日新聞に取り上げられたのを皮切りに、花結びが注目される機会が増えていったという²⁵。とりわけ活躍の転機となったのは、1980年8月25日から28日に放送されたNHKの番組「婦人百科」に橋田氏と田中氏が出演したことであった²⁶。放送直後に東京の主婦の友社から花結び講座の開講依頼があり、翌月から開講されることになり、橋田氏と田中氏は講師として関西から東京に教えに出向き、翌年1月以降、1986年の主婦の友社のカルチャーセンター閉鎖まで、田中氏が一人で教えた。講座開講時には、主婦の友社の別講座の有職組紐道明による組紐講座に在籍した約80名が受講希望したため、講師側で集客する必要はなかった。

この組紐が当時多くの女性を惹きつけていた理由については、香淳皇后が7代目道明新兵衛(1904-1972)から組紐技術を習い、趣味としていたことが大きいという²⁷。つまり、先述の雑誌広告にみる組紐講座の受講層とは異なり、香淳皇后に倣って趣味あるいは嗜みとして組紐技術を身につけ、皇后像に自らを近づけたいと考える裕福な女性がいたことを示唆している。ソースタイン・ヴェブレンは、出生、階級、社会的地位に厳密に規定されていない現代社会で、より良い社会的地位を自ら確立するために、消費は社会的競争と模倣によって動機づけられ、物が自分のあり様を提示するために使われると説いている²⁸。本件もその一例に該当するものと想定される。このように、歴史を遡ると香淳皇后にあやかり、1980年に主婦の友文化センターで開講した花結び講座が、カルチャーセンターにみる花結び講座の嚆矢と

なり、花結びの伝承はカルチャーセンターに包摂された結果、伝統的な師弟関係によるお稽古から消費対象物に移行したと捉えることができる。事実、開講直後から主婦の友社よりテキストの作成を依頼されたことに応答する形で、田中氏は結び方の図解を作成し、講座の度にプリントが配布された。それらを3冊のテキスト『飾り結び図解（初級，中級，上級）』（個人出版，出版年不明）に纏めたものが、田中氏門下の花結び講座で現在も使用され、これが花結びの結び方を広く伝承する契機となった。結び方の図解化の依頼を受けるまでは、師匠である橋田氏の教え、すなわち「技術は体で覚えるもの、手から手で教えるもの」という考えに従い、田中氏は結びの図解を作成していなかったという。したがって、ここに所謂個人教授が基本となる「口伝」による花結びの伝承から、「一斉教授」を目的とする図解による教授法への転換を見ることができる。無論、江戸時代以降、書籍に結びの図解は記載されてきたものの、結ぶ手順の詳細が省略された、あるいは誤記があった図解も多く、図解から結びを再現することは必ずしも容易ではなかった。その点で、カルチャーセンターで用いられるようになった結びの図解とは似て非なる性質を有する。結び方のわかりやすい図解化により、知識の伝達および個人学習が容易になった。田中氏のもとで経験を積んだ者がカルチャーセンター等で教授するようにもなったが、田中氏の意向により、免許状制度は導入されなかった。この様に、趣味として花結びを嗜む女性は全国に広がってゆく。その証拠に、花結びを写真や図解で解説した書籍の出版数は1990年代以降に増加した（図9）。さらに、『NHK まる得マガジン “ひも結び” で暮らしを彩る 講師田中年子』（2010）は、NHK の教育テレビで用いられたテキストであり、公共放送を通じても花結びは周知されるに至った。

他方、結び方の図解があってもテキストに依拠して花結びを学ぶことには難しい側面もある。そのため、花結びの技能を「お稽古事」として学ぶ「花結び講座」の需要は依然として根強く、東京および関西を中心に、朝日カルチャーセンター、NHK 文化センター、近鉄文化サロン等において講座が開講されてきた。結び愛好者の数がどの程度いたのかという疑問

著者，書籍タイトル（出版社，出版年）	著者，書籍タイトル（出版社，出版年）
西垣琳弘『かざり緒むすび』（総合科学出版，1976）	田中年子『花結びと袋もの』NHK おしゃれ工房（日本放送出版協会，2004）
橋田正園『ひもの舞曲 飾り結び』（小林学院，1976）	田中年子『くらしを楽しむ四季の花結び』（淡交社，2005）
西垣琳弘『茶人のかざり結び』（総合科学出版，1979）	川島美園『図解はじめての飾り結び』（水曜社，2006）〈初版〉
『はな結び入門』（淡交社，1980）	川島美園『図解はじめての飾り結び2』（水曜社，2006）〈初版〉
橋田正園『やさしい飾り結び（NHK 婦人百科）』（日本放送出版協会，1983）	『NHK まる得マガジン “ひも結び” で暮らしを彩る 講師田中年子』（日本放送出版協会，2010）
田中年子『むすび』（京都書院，1993）	松田愛子『はじめての花結び手芸：紐で楽しむ』（日貿出版社，2011）
永井百合子『花結び：美しい紐あそび』（淡交社，1997）	川島美園『吉祥を呼ぶ「飾り結び」：いいことが起こる「結び」のアクセサリーと小物』（PHP 研究所，2011）
松田愛子『紐で楽しむはじめての花結び手芸』（日貿出版社，2000）	田中年子『暮らしを彩る飾り結び』（日本放送出版協会，2012）
田中年子『花結びのアクセサリー』NHK おしゃれ工房（日本放送出版協会，2002）	永井亜希乃『はじめてでも必ずできる飾り結び：15の基本結びをやさしく図解』（世界文化社，2015）

図9 「花結び」に関する書籍一覧，筆者作成

がここで浮上するが、具体的な統計資料は残されておらず、その目安とできるのは、「日本結び文化学会」の会員数である。同学会は、1992年に井筒雅風氏を会長にすえ、副会長の田中氏が中心となり、会員数約100名の規模で設立された。本「学会」は学術団体ではなく、その活動実態は、毎年会報誌『むすび』を発行し、そこに結びに関する資料紹介や論考発表がなされてきたほか、展覧会を企画し、日本全国で作品展示を実施するものであった。会員の内訳は、9割を占める花結びの愛好者のほか、水引やロープ結びの愛好者であり、9割以上が女性であったと田中氏は述べる。ではなぜ花結びは手芸として女性に愛好され、伝承されてきたのであろうか。その要因として示唆的なのは、片岡栄美が「ジェンダーと文化」について指摘する内容である。すなわち、日常的実践である文化活動に対して人々がジェンダー・バイアスを伴う意味付与や意味解釈を行い、「編み物、茶道、お菓子作りが得意」という言説と女性を自然に結びつけ、ジェンダー化した文化活動のイメージが再生産されているという可能性である²⁹。それを踏まえると、平安貴族文化への憧憬から江戸時代に女性文化として女子用往来物を通じて女性に受容されてきたことに端を発し³⁰、明治時代以降も女性を中心に文化として伝承され、今なお女性文化としてのイメージを再生産し続けているとも理解し得る。

おわりに

本稿は、1970年代後半から1980年という消費主義社会が台頭する中、江戸時代から受け継がれた花結びが手工芸に移行する過程とその社会背景を明らかにした。当該期の花結びに関する手芸の受容を考察するために『装苑』および『ドレスメーカー』にみる記事および広告を分析した。その結果、花結びが誌面に登場したのは、この期間を通じて両誌では一度のみであり、「和の手芸」として注目されていなかったことが判明した。この事実を踏まえると、もしカルチャーセンターで花結び講座が開講されなかった場合、女性を中心とする花結びの伝承は途絶えていた可能性があったといえる。また、「和の手芸」に分類できる「和裁、袋物、手織り」の通信講座広告には、趣味を通じて副収入を得ることが奨励され、「和の手芸」に消費と収入を得るという二重の価値があったことを明らかにした。他方、1980年に組紐を学ぶ女性を受講者としてカルチャーセンターで始まった花結び講座では、内職層と異なる受講者が香淳皇后に倣い、組紐技能を学んでいたと調査の結果わかった。その背景には、山崎明子が明らかにした明治以降の皇后による養蚕の表象的意味にみるように、理想の女性像が皇后を頂点に提示され、それに国民が倣う形で良妻賢母の価値が醸成されてきた側面があり³¹、それと同様の構図でカルチャーセンターにて組紐および花結びが伝承されたと理解し得る。なお、1980年代以降、江戸時代から伝わる結び、すなわち「伝統」と異なる文脈で花結びが手芸として技巧的発展を遂げた様相およびお稽古に通う動機の解明は今後の課題とする。

註

- 1 『日本国語大辞典 第二版 第十巻』(小学館, 2001), p.1312.
- 2 矢島由佳「江戸時代にみる花結びの伝承 ― ジェンダーの視点から」『デザイン理論』83号(意匠学会, 2024), pp.49-63.
- 3 斎藤佳子「戦後の洋裁学校の興隆・衰退に関わる社会的背景の要因分析」『日本家政学会誌』vol.67 No.5, (日本家政学会, 2016), pp.291-292 (pp.285-296). 熊澤慧子「第8章 ファッションの国際化の時代」『日本服飾史』増田美子編(東京堂出版, 2013), pp.175-176, pp.179-180 (pp.167-191).
- 4 岩永雅也『現代の生涯学習』(財団法人放送大学教育振興会, 2012), pp.148-149.
- 5 歌川光一「カルチャーセンター研究史: 生涯学習・社会教育研究における趣味講座の位置づけをめぐる試論的考察」『生涯学習・社会教育学研究』第33号, (東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育学研究室紀要編集委員会, 2009), pp.67-77 (pp.68-69). 山本思外里『大人たちの学校: 生涯学習を愉しむ』(中央公論新社, 2001), pp.47-48. 朝日新聞(東京版, 1974年2月2日, 朝刊18頁).
- 6 岩永雅也前掲書, p.149. NHK文化センター『会社沿革』<https://www.nhk-cul.co.jp/company/company-2.html> [2024年5月1日閲覧]. 読売・日本テレビ文化センター『会社案内』<https://www.ync.ne.jp/company.php> [2024年5月1日閲覧].
- 7 山本思外里前掲書, pp.6-7. 神野由紀「趣味の大衆化: テイストとホビーの境界線」『「趣味に生きる」の文化論』宮入恭平, 杉山晃平編, (ナカニシヤ出版, 2021), pp.2-10 (p.6). 日高勝之『1970年代文化論』(青弓社, 2022), pp.72-74. 渡邊洋子『「男女共同参画」「異文化共生」を展望する「趣味・習い事」プログラムの研究(課題番号: 16530501): 平成16年度~平成17年度科学研究費補助金<基盤研究(C)>研究成果報告書』(京都大学, 2006) p.6.
- 8 歌川光一前掲論文, p.69.
- 9 上野千鶴子『「女縁」を生きた女たち』(岩波書店, 2008), pp.2-7.
- 10 井上輝子『日本のフェミニズム: 150年の人と思想』(有斐閣, 2021), pp.257-266.
- 11 神野由紀前掲書, pp.6-7.
- 12 井上雅人『洋裁文化と日本のファッション』(青弓社, 2017), p.117.
小泉和子『洋裁の時代 日本人の衣服革命』(OM出版, 2004) p.22.
- 13 井上雅人前掲書, p.114.
- 14 井上雅人前掲書, pp.114-116. 洋裁学校ブームのなか, 洋裁学校に通う動機については, 「戦後の空前の洋裁学校ブームの中で, 多くの女性は, 嫁入り前の習い事として洋裁を学ぶために洋裁学校に通った一方で, 洋裁の職能人を育成する教育機関は殆どなかった」という1952年における桑沢洋子の見識が参考になる(常見美紀子『桑沢洋子とモダン・デザイン運動』(桑沢学園, 2007), pp.126-128).
- 15 『ドレスメーカー』に「和の手芸」についての記事はあまり見られなかったが, 着物や和装について教育的に紹介していた。1974年度は, 「きものミニ百科」として, 着物のTPOや, 柄について, 三田村環の記事が紹介された。1975年度は, 三田村の指導のもと「きものコーディネーターガイド」, 1976年度は三田村の「きものふるさと」と題した各地の着物の布地の紹介, 1977年度は「小紋十二ヵ月」という記事が掲載された。1978年度は「わたしのきもの歳時記」と題した読者や著名人の顔写真付きで着物に関する意見を述べる記事が掲載された。1979年度は「ヤングのきもの日記」で読者の顔写真付きで着物に関する意見記事や着物の紹介記事が見られた。

- 1980年度は、「東京きもの日記」として、読者の顔写真付きで着物を着ることの良さを紹介する記事が見られた。他方、『装苑』でも1975年の通年の連載にみるように、文学作品に登場する着物の裂地、文様、柄に関する連載があり、着物に関する知識を服飾雑誌が啓蒙していた。
- 16 青木藍「家庭生活における女性の手仕事の変遷：雑誌「暮らしの手帖」記事調査を中心として」『同志社女子大学生活科学』vol.49（同志社女子大学，2016），pp.1-4（pp.1-9）。
- 17 ジュディ・ブリテン『手芸の百科 ヨーロッパの伝統的技法のすべて』（文化出版局，1981），p.174。
- 18 Saint Laurent, Yves, Cocktail Dress（1967-1968 製作），Victoria and Albert Museum 所蔵，<https://collections.vam.ac.uk/item/O326749/cocktail-dress-saint-laurent-yves/> [2024年3月7日閲覧]。
- 19 日高勝之前掲書，p.20。
- 20 アンドルー・ゴードン『ミシンと日本の近代：消費者の創出』大島かおり訳（みすず書房，2013），pp. 302-306。
- 21 『【参考資料 2】令和5年度家内労働概況調査の結果』（厚生労働省，2024年3月19日）https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_38812.html [2024年4月15日閲覧]。
- 22 「資料表－1：総人口，年齢3区分（0～14歳，15～64歳，65歳以上）別人口および年齢構造係数：1947～2015年」『日本の将来推計人口（平成29年推計）』国立社会保障・人口問題研究所（2017年4月10日）https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/db_zenkoku2017/s_tables/app1.htm [2024年4月15日閲覧]。「統計トピックス No.134『卵（う）年生まれ』と『新成人』の人口——令和5年 新年にちなんで——（「人口推計」から）」（総務省，2022年12月31日）『卵（う）年生まれ』と『新成人』の人口——令和5年 新年にちなんで——（「人口推計」から）」（総務省，2022年12月31日）<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/topi1340.html> [2024年4月15日閲覧]。
- 23 アンドルー・ゴードン前掲書，pp.306-307。
- 24 池田忍『手仕事の帝国日本：民芸・手芸・農民美術の時代』（岩波書店，2019），pp.54-58。
山崎明子『近代日本の「手芸」とジェンダー』（世織書房，2005），p.244。
- 25 朝日新聞（東京版，1980年1月7日，朝刊13頁）。
- 26 NHKアーカイブス https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009040058_00000 [2023年9月15日閲覧]
- 27 7代目道明新兵衛は，1962年に香淳皇后に組紐技術を皇居にてご進講して以来，毎月皇后にお教えした（『日本美術年鑑』昭和48年版（美術年鑑社，1974），p.89）。「香淳皇后がご趣味で組紐をされ，古代の組紐を復元なさったほか，香淳皇后のお勧めで美智子皇后と常陸宮妃華子様も組紐をなさった」とテレビ報道もなされた。（日本テレビ「皇室日記」，2007年8月12日放送 <https://www.ntv.co.jp/koushitsuunikki/oa/070812main.html> [2024年5月1日閲覧]）。
- 28 ソースタイン・ヴェブレन『有閑階級の理論 新版』村井章子訳（ちくま書房，2016），pp.110-138。
- 29 片岡栄美『趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー』（青弓社，2019），pp.259-260。
- 30 矢島由佳前掲論文。
- 31 山崎明子前掲書。

Transmission of Hanamusubi from the Late 1970s to the 1980s: An Examination of the Role of Adult Education Centers and Social Backgrounds

YAJIMA, Yoshika

Historically, *Hanamusubi* [花結び] has been considered as an elite cultural practice among women, during the Heian period (794–1185) known for its decorative knotting used in various applications. The study traces the evolution of this craft during a period marked by significant social and technological changes. The 1970s saw advancements in the textile industry, leading to the proliferation of ready-made clothing and a decline in traditional sewing education. This shift is contextualized within broader changes in women's awareness and the rise of handicraft culture as a form of consumer activity. The article delves into the representation of *Hanamusubi* and other traditional handicrafts in magazines such as *Soen* [装苑] and *Dressmaking* [ドレスメーカー], highlighting their commercialization and integration into popular consumer culture. Furthermore, the study explores the critical role of adult education centers in reviving and disseminating *Hanamusubi* in the 1980s. These centers provided a platform for women to learn and engage with traditional crafts, contributing to the resurgence of interest in *Hanamusubi*. Through the analysis of articles, advertisements, and interviews, this study illustrates how *Hanamusubi* transitioned from a niche cultural activity developed during the Edo period to a widely appreciated handicraft, mirroring broader social and cultural shifts in Japan from the late 1970s to the 1980s. The investigation underscores the intersection of consumerism and gender, providing insights into the dynamic landscape of Japanese handicraft traditions.

I would like to express my gratitude to Ms. Toshiko TANAKA, a leading expert in Japanese knotting techniques, for kindly sharing her experiences during the interview. I would also like to extend my thanks to Kyoto Women's University Library for granting me access to their invaluable resources during my research as well as to those who kindly shared their insights, which have enabled me to improve my arguments.